

# OUTPUT MANAGEMENT

## PDFをアウトプット標準に 統合環境を目指す アイエステクノポート

アウトプットのオープン性を実現する標準仕様をPDFに定め、PDF形式により多様なサーバーの出力データを一元管理することで、アウトプット環

境の統合化を図るのがアイエステクノポートである。

同社はIBM i上で稼働するプリンティングソリューション「UT/400」シリーズを提供し、なかでもスプールファイルから表現力の高いPDFファイルを生産する「UT/400-iPDC」は、高い実績を誇る。

今年4月に発表されたPower SystemsおよびIBM iベースのアプリケーションサーバー「iPDC Server」は、このUT/400-iPDCのエンジン部分を搭載し、かつデータストリームに対する7種類のインターフェースをサポートする。

すなわちIBM iのスプールデータ、ASCII、EBCDICの3種類だが、ASCIIとEBCDICはそれぞれCSV、LINE、Textの各フォーマットをサポートしているので、合計7種類である。

これによりIBM iはもちろん、Win

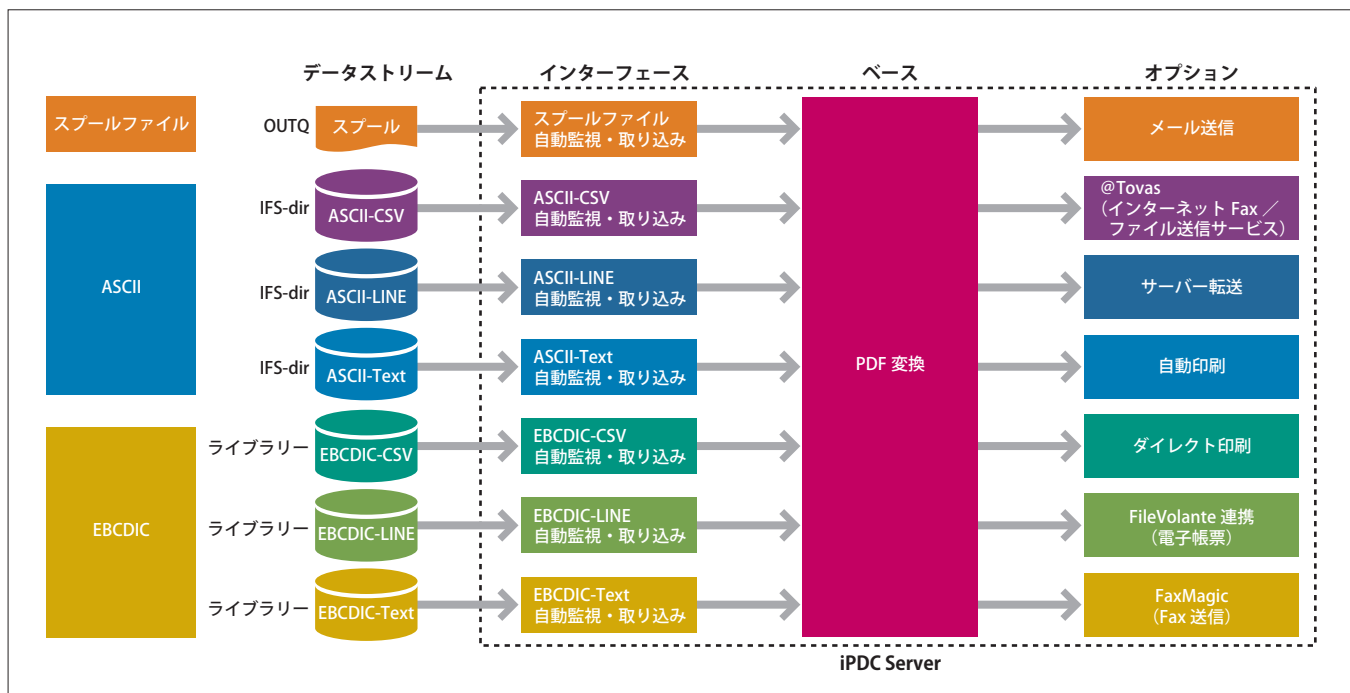
dows、UNIX（AIX、HP-UX、Solaris）、Linuxそしてメインフレームまで、データ送出元のプログラムを変更することなく多様なサーバーからデータを受け取り、PDFに変換して一元管理することが可能になる。

さらにUT/400シリーズで提供される各種オプションを導入すれば、これらのPDFに対して、メール/Fax送信、電子帳票化、サーバー転送、各種プリンタへのダイレクト印刷などをサポートできる（図表2）。

このようにiPDC Serverを中核に、メインフレームからWindowsまで多様なサーバーが混在するアウトプット環境全体をPDFで統合しようというのが同社の戦略なのである。

ちなみに統合サーバーとしてPower Systemsを選んだのは、安定性や高可用性、運用管理性、セキュリティなどが優れる点に加え、大規模なマルチタスク処理が可能で、大量の帳票印刷を

図表2 iPDC Serverによるアウトプット統合の概要



サポートできるからだという。

メインフレームの大量印刷までを視野に入れた統合化を図るとなれば、PCサーバーでは負荷が高すぎると判断したようだ。PCサーバーの別途導入を不要とし、すべてIBM i上で完結する運用を目指してUT/400シリーズを設計してきた同社らしい選択である。